

星野道夫の神話と現代社会

濁川 孝志 立教大学コミュニティ福祉学部*

The Myth of Michio Hoshino and Modern Society

NIGORIKAWA Takashi

はじめに

昨年度（2018年度）の日本トランスパーソナル心理学/精神医学会学術大会は、『自然とスピリチュアリティの関係を考える』というテーマで行われました。その際私は基調講演として、『星野道夫の神話』というお話をさせて頂きました。本稿では、その講演内容並びに拙著『星野道夫の神話（コスモス・ライブラリー）』（濁川 2017）ベースとし、現代社会における“星野道夫”や“神話”の意味について考えてみたいと思います。

写真家の星野道夫が亡くなってから二十余年の歳月が流れました。私は、長年ウエルネスという分野の研究に携わってきましたが、人の心や生きがい観について研究するこのフィールドで、星野の写真や文章、そして彼の生き方それ自体が、とても大切な研究対象でした。そんな自分にとって、この二十余年という年月は「もうそんなに経つのか、あつという間だった。」というのが素直な感想です。星野道夫作品との邂逅は、とあるカリブーの写真だったと思います。ある写真集にあった一片のカリブー

の写真。夕焼けのオレンジの中に浮かび上がった一列のカリブー達が、まるで無限の時間の中に漂っているような幻想的な写真。私は圧倒されました。以来、星野道夫の写真は見尽くすようになったのです。グリーゼやムース、時にオオカミ、動物だけでなく極北の山々やオーロラ、そしてそこに暮らす人々の情景、そのどれもが物語をもって語りかけてきました。エッセイも、貪るように読みました。星野の静かで暖かく透明な文章は簡単に私を魅了し、気づくと彼の著作はすっかり読み尽くしていました。ですから、星野道夫がカムチャッカで不慮の死を遂げたというニュースに接したときは、本当にショックでした。この事件を知らせる小さな新聞記事を読んだ時、思わず唸り声を出したのを覚えています。でも、こんな思いを持つのは私だけでは無いような気がします。というのは、いまだに星野道夫の写真展には多くのファンが訪れ、また近年に至っても星野道夫に関連した著作が出版され続けているという事実があるからです。

なぜ星野道夫は、亡くなって20年も経つのにそんなに人気があるのか。それは、彼が遺した写真や文章に我々日本人が求めて止まないモノが隠されているからでしょう。それは何か。つまり、それは我々の心の拠り所となる物語、つまり神話だと私は考えます。星野道夫が遺した

* nigo@rikkyo.ac.jp
立教大学コミュニティ福祉学部
〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26 立教大学

神話。そこには、多くの日本人が理想とするメンタリティや未来の自分自身を位置づけるためのヒントが隠されています。人々は知らず知らずのうちに、星野道夫の著作から、自身が心の拠り所としたい物語を紡ぎ取っているのかも知れません。神話とは本来、宇宙の成り立ちや人間・動植物など生命の起源を伝承的に説くものであり、同時に人が生きる上でのルールやタブーを暗に示すものです。20年以上前に星野自身もいくつかの講演会で述べていましたが、先行きの見えない現代社会は、人々が自分の生き方を確認するうえでの神話を必要としている時代です。星野が逝ってから20年経った現在、この混迷は深まるばかりのように見えます。富める者と貧しい者という二極化。この格差は拡大するばかりで、世界中の富の半分以上を人口のわずか1%の富豪が独占するという現実。一方で2020年現在、日本では先の東北大震災の被災者が未だに仮設住宅暮らしを余儀なくされ、アフリカや中東では自国で暮らすことすらできない多くの難民がさ迷っています。このような格差を生んでいる元凶は現在の資本主義システムに違いなく、物質的繁栄こそが“幸せ”であると勘違いした拝金主義が政治や経済をミスリードしている結果に他なりません。これらのシステムは、同時に世界各地に深刻な自然環境破壊をもたらし、それは気候変動や自然災害として我々の生活を脅かしています。猛毒の核廃棄物を生み出し、それを処理する技術すら持たず未来の世代に押し付ける原発などは、そのような拝金主義の象徴でしょう。

こんな時代を生きる私たちに、自身の生き方と作品を通じて、未来の社会を築くためのヒントを遺してくれたのが星野道夫だと思うのです。その星野道夫が北米からユーラシアのネイティブインディアン達が共通してもつワタリガラスの神話の起源を求める旅に出るようになり、その旅の途上とも言うべき時に、不慮の事故で帰

らぬ人となりました。しかし、彼はその時すでに自身は気づかないままにある種の神話を遺していたのではないかと私は思うのです。

繰り返しになりますが、私は自身のテーマとして長年にわたり星野道夫の示したスピリチュアリティや、それに関連する神話などに関して考察してきました。ここではそれらの研究成果を踏まえ、星野道夫の遺した著作を私たちの未来を照らす神話という観点からとらえ、現代社会との関係から論じてみたいと思います。

I. 星野道夫という人

最初に、簡単に星野道夫の足跡をご紹介しますと思います。

星野道夫は、1952年に千葉県市川市で生まれました。彼の心には少年のころから広大な原野への憧れが芽生えており、電車で揺られている時、そして都会の雑踏の中にいる時も北海道のヒグマのことが頭をかすめるような少年でした。この星野のエピソードは比較的よく知られている事実ですが、普通の人間から見れば一風変わった感性を持つ少年だったようです。海外への憧れも強く、1969年16歳のときに単身アメリカに渡っています。船による長旅を経て、初めての異国、米国ロスアンゼルス港に降り立った時の感想を星野は次のように述べています。

町から離れた場末の港には人影もまばらで、夕暮れが迫っていた。知り合いも、今夜泊まる場所もなく、何ひとつ予定を立てていなかったぼくは、これから北へ行こうと南へ行こうと、サイコロを振るように今決めればよかった。今夜どこにも帰る必要がない、そして誰も僕の居場所を知らない……それは子ども心にどれほど新鮮な体験だったろう。不安などかけらもなく、僕は叫びだしたいような自由に胸がつまりそ

うだった。（星野 2003：旅をする木：星野道夫著作集3巻）

これが果たして若干16歳の高校生が、初めて異郷の地に立った時抱く感想でしょうか。そこには、微塵の不安もない。あるのは、ただただ未来に広がる自由と可能性だけ。この時星野は約40日間、ヒッチハイクやバスを使いながらアメリカやメキシコを旅していますが、当時の日本は今のように誰でも簡単に外国へ行けるような時代ではありません。海外の情報も無ければ、1ドルが360円もした時代でした。それを考えれば、若干16歳の少年がこのような旅することは、並外れた行動力としか言い様がありません。

その後、慶應義塾大学に進学した星野は、それまでも北の自然へ関心を抱いていましたが、「アラスカ」という写真集を手に入れたことをきっかけに、北への想いがいよいよ抑えられなくなりました。この写真集を星野は神田の古本屋で手に入れたのですが、それは星野が来るのを待っていたように置かれてあり、購入してからは次のページの写真がめくる前に分かるほど、読み込んだと彼は言っています。その中でも、「シシュマレフ」という海岸線にある小さな村の夕暮れ時を空撮した写真は星野を魅了し、どうしてこんな荒涼とした所に人の生活があるのか、とても不思議に感じたそうです。そして、どうしてもこの村を訪れたい衝動にかられ、知る人が誰もいないこの村に、「Mayor of Shishmaref, Alaska, USA（アラスカ シシュマレフ村 村長殿）」という宛名で手紙を書き、幸運にも予期せぬ返信をもらいました。受け入れを許可する返信をもらった彼は、1973年20歳のときにシシュマレフ村を訪れ、当初1か月ほどの予定のところを3か月間滞在しています。このエピソードは、実に星野の星野らしさを物語っています。普通の感覚であれば、どれほど

興味を持とうが、名も知らず住所すら解らない人に手紙を書いてまで未知の土地を訪れようとはしません。今のようにインターネットで簡単に情報を仕入れることなどできず、そこにどんな生活があり、どんな危険が潜んでいるかすら解らない辺境の地です。これは、自分の興味や直感を信じ、未知を恐れず進んでゆく星野道夫という人の本質を垣間見せるような逸話です。

このシシュマレフを訪れた翌年の夏、星野は無二の親友を山で失います。星野道夫は当時社会人山岳会に所属し、谷川岳をはじめ日本の名だたる岩場を登っていますが、この事故は星野も誘われた妙高連山の焼山登山でした。星野は別の山行で同行できず、友人のグループが向かった焼山が突然噴火したのでした。余談ですが、この山行に友人は星野道夫の大切なカメラを借りて持参していますが、そのカメラだけは無傷で星野のもとに帰ってきたようです。昨日まで元気に、お互いの将来を語り合った友人がもうこの世にいないという不条理。誘いを断った自分が、生きているという事実。大きなショックを受けた星野は、生きることを見いだせなくなり、人生の方向性に関し一年ほど悩み続けます。当時の事を星野は、「これからの自分の生き方、人間の一生……親友の死から、何か結論を見出さないと前に進めない状態だった。」と記しています。（星野 2003：アラスカからのメッセージ：星野道夫著作集5巻）悩み抜いた末に彼は、「そうだ、好きなことをやってゆこう」という答えに辿り着き、アラスカに再び渡ること、写真を撮って生きることを決意しました。ところで、この「好きなことをやってゆこう」という決意は、簡単そうで、実はそれほど楽に得られる心境ではありません。私は仕事柄、自分の将来を考え就職活動に悩む多くの大学生を見てきました。しかし彼らの中で、自分の好きなことを仕事にしようとする学生は僅かです。大企業、優良企業に入る安定路

線を良しとする日本の風潮の中であって、「自分の好きなことをやる」というのは、すごく勇気が要る決断なのです。星野道夫がもがき苦しんだその心の内を、我々他人が推し量ることはできません。しかし、悩み抜いた末に辿り着いたこの単純な答えは、揺るぎない方向として彼の心のコンパスに示され、その針はアラスカの地平を指し示したのです。

大学卒業後2年間ほど写真家の助手を勤めた後、1978年に星野は再びアラスカへ渡り、アラスカ大学の野生動物管理学部に入學しました。大学ではフィールドワークで、早い頃からアラスカの自然の深層部へ入り、自然観察のために必要な様々な技術やノウハウを身に着けました。卒業することが目的ではなかった星野は、1982年にアラスカ大学を中退し、写真撮影に専念するようになります。なかでも中学生の頃から憧れていたという熊（グリズリー）の撮影を進め、1985年に初の写真集『グリズリーアラスカの王者』を出版し、翌1986年、同書で、当時動物写真家の登竜門と言われた平凡社主催のアニマ賞を受賞しました。同じく1986年には初のエッセイ集『光と風』を出版しています。その後旅を重ねながら、多くのエッセイと写真集の出版をし、1990年には連載『風のような物語』が評価され、第15回木村伊兵衛写真賞を受賞しました。同じ年にアラスカのフェアバンクスに土地を買い、家を建てました。アラスカへの定住を決心したのです。その後星野は、アラスカ先住民への関心を高め、神話を辿る旅をするようになります。そして1996年43歳の時に、テレビ番組の取材で訪れていたロシアのカムチャッカ半島でヒグマに襲われて急逝しました。星野道夫のアラスカでの活動期間は約20年弱でした。従って、43年という生涯の半分近くを極北の大地で過ごした人でした。

私はこれまで、星野道夫のことを悪く言う人をほとんど知りません。私の知る限り、少して

も星野作品に触れた人は、それが写真であれエッセイであれ異口同音にその素晴らしさを語ります。私の教える学生の中には、星野道夫を知ることによって自分の生き方を見つめ直す者すら少なからずいました。先ほども述べましたが、安定志向が強く就職に向けて既定のスケジュールに沿った横並び路線を敷く若者にとって、将来に向けた保障は何もなしに、好きな土地で好きなことをやって行くという星野の生き方は、余りにも鮮烈にそして眩しく映るのでしょう。星野自身もそうだったように、もがき悩みながら自分の道を見つけ出す作業はとても苦しいものです。しかしこの過程を経て得られた結論は、そのプロセスが大変であればあるほど、彼らの確固たる道筋になるようです。

星野を高く評価し賛辞を惜しまない多くの人たちの中で、彼を敬愛しつつも稀にみられる批判的な眼差しがあるとすれば、それは次の二点に集約されそうです。一つは、銃を持たずに危険なアラスカの原野を旅したこと。そしてもう一つは、目に見えないものの価値に重きを置き過ぎたのではないかと、いうものです。この二つの疑問に対して、私は次のように考えています。まず、星野道夫が熊の王国であるアラスカの原野を銃無しで旅した事についてですが、彼は『アラスカ光と風』の中でこの点に関する心境を次のように述べています。

いつか、ライフルを持って長期の撮影にはいったことがある。じつに安心だった。けれども、どこかで自分の行動がとても大胆になっていたような気がする。最終的には銃で自分を守れるという気持ちだが、自然の生活の中でいろいろなことを忘れさせていた。不安、恐れ、謙虚さ、そして自然に対する畏怖のようなものだ。(星野 2003 : アラスカ 光と風 : 星野道夫著作集1巻)

また、映画監督龍村仁が1995年に撮った、とあるインタビュー映像の中では次のようにも語っています。

「どこか近くに熊がいて、いつか自分が殺られるかも知れない、と感じながら行動している時の、あの、全身の神経が張りつめ、敏感になりきっている感覚が私は好きです。あるインディアンの友人が言ってたんだけど、人類が生き延びてゆくために最も大切なのは、“畏れ” だって。私もそう思います。我々人類が自然の営みに対する“畏れ”を失った時滅びてゆくんだと思うんです。今私たちは、その最後の期末試験を受けているような気がするんですよ。」
（龍村 2003：地球交響曲第三番 魂の旅）

星野は銃を持つことによって精神が弛緩し、と同時に自分の中から大自然への畏敬の念が薄れてゆくのを恐れました。自分が強くなったと錯覚し、上から目線で自然の営みを観てしまうことを極端に嫌ったのです。人間など及びもしない自然の持つ圧倒的な雄大さを表現するとき、この上から目線の持つ傲慢さが無意識のうちに自分の目を曇らせてしまうことを、彼は知っていたのでしょう。銃を持たないで、つまり、あくまでも自然と対等の立場で向き合おうとする誠実さ。それこそが、星野道夫によって表現された自然の情景が私たちを魅了する根源になっていると思うのです。

批判の二つ目、目に見えないものの価値に重きを置き過ぎたのではないか、という意見ですが、星野は確かにいくつかのエッセイや講演の中で、「目に見えるものに価値を置く社会と、目に見えないものに価値を置く社会を思うとき、自分は後者の思想に魅かれる」と述べています。

ここで言う「目に見えるものの価値」とは、

物質的な価値あるいは現実的な視点、そして「目に見えないものの価値」とは、精神的な価値あるいはスピリチュアルな視点と捉えて良いでしょう。批判的意見として、例えば作家の寮美千子さんは星野道夫を評し、その晩年には「心＝神話的視点」の車輪に重きを置き過ぎ、「現実＝科学的視点」という車輪をおろそかにしてしまったのではないかと述べています。（寮 2003：神話になった少年：ユリイカ詩と批評2003年12月号）その上で、星野が示した「魂の世界」を取戻し現実をより豊かにするためにこそ、我々は、「目に見えるもの」と「見えないもの」、「現実的解釈」と「神話的解釈」、矛盾するこの両方を受け入れる心の強さを持たなければならない、と記しています。寮さんのこの指摘自体は、至極妥当なものです。経済的価値が重要視され、理想と現実の狭間に多くの矛盾を抱える実社会で生きている以上、「目に見えないものに価値を置く」ことだけで生きるは無理であり、それは同時に要らぬ摩擦を産み出す元となる可能性すらあります。しかし星野が、必ずしも「現実＝科学的視点」をおろそかにしたとは思えません。星野は、無垢の北極圏の自然が、「石油資源」のため開発されそうになった現実をきちんと見据えていました。また、アラスカを核実験場にしようとした「プロジェクト・チェリオット」計画に関しても、そして「アラスカはいったい誰の土地なのか」という議論を生んだ原住民土地請求条例についても、本質的問題点を客観的にとらえ、それらの経緯を書き残しています。しかし、彼はそれらの問題を直接的に批判するという方法ではなく、写真や文章を通じて貴重な手つかずの自然や、長い歴史の中で連綿と引き継がれてきたアラスカ原住民の営み、自然と調和した永続性のある彼らの生き方を私たちに伝える、という手法をとったのです。星野の用いたこの方法は、寮さんの言うところの「心の物語」

を語るという手法でした。それは、現実が持つ矛盾や問題点を声高に指摘するというものではありません。しかしだからこそ、時として人の心の深い所に静かに訴え、私たちが潜在意識に宿す良心や自然への畏怖の念と共鳴したのかも知れません。

アラスカ生活の中で星野道夫は、多くの先住民と親密な交流を持ちました。その過程で、彼は先住民が持つ伝承や古老たちが語り継ぐ物語の中に、人間が大自然の営みと調和して生きてゆくための様々な叡智が秘められていることに気づいていました。そんな星野道夫が遺した業績は、技術文明の中に生きる私たちに、先住民の叡智から何を学び、未来の世代に何を伝えてゆくべきかを指し示す羅針盤のようです。

Ⅱ. 星野道夫と現代社会のウェルネス

ではここで、現代社会におけるウェルネスと星野道夫の関連について述べたいと思います。この聞き慣れない“ウェルネス”と言う言葉ですが、これは一口で言えば、人間の“健康な生き方”を考える研究分野です。もう少し付け加えると、心身の健康を重要な基盤と捉えながらも、しかしそれだけではなく、「“生きがい”を持って日々を積極的に生きているか？」を問うような学問領域です。例えば、身体に多少の障害があったり、あるいは余命を宣告されるような状況であっても、生きる目標や自分の使命などをしっかり認識して、日々を大切に暮らしていれば、その人はウェルネスレベルが高い、という理解になります。従って逆もまた真なりで、医学的には健常でも、自分の生きていく方向性や生きがい、使命などが見えない状態はウェルネスレベルが低いということになります。

では、なぜ私がこのウェルネス領域の講義の中で星野道夫を取り上げるのか。それは現代社会を健全に生きてゆこうと考えるとき、言い換

えれば、現代人のウェルネスレベルの向上を考えたとき、星野道夫のような存在がとても参考になると思えるからです。今の日本は、ある意味、とても生きづらい社会のように見えます。世界的な視点で見れば日本はとても豊かな国で、平均寿命や国内総生産（GDP）、そして国民生活の豊かさを示す指数などで日本は世界の上に位置しています。しかし豊かさとは、いったい何でしょうか。と言っているのは、日本の世相に目を向けると気持ちが暗くなるような事柄が山積しています。例えば、子供たちの社会に見られる、いじめの深刻化、陰湿化。青少年犯罪の凶悪化。ニートや引きこもり。そして人口比で考えれば、世界的にも類を見ない3万人近い自殺者。富める者と貧困層の格差拡大。これらの社会問題には、総じて人の“心の在り方”が関連していると言われていています。専門家は、このような世相の背景を「蓄財に関する欲望の充足、つまり物質的な価値観ばかりが目ざされた結果として、日本社会の生活水準は向上しつつある一方で、人々の生きる意味や目的意識が失われたのではないか」と分析しています。確かに、今の日本の社会は、物質的生活水準はあるレベルに達しているものの、生きる方向を見い出せない若者たちが沢山さ迷っているように見えます。面白いことに、今より生活が苦しかったはずの戦時中やその後の高度成長期には、現在ほど多くの自殺者はいませんでした。それは何故か。答えは簡単で、日々を生きる方向性が明確だったからです。生活が苦しいだけで人間はこの人生を放棄するのではなく、むしろ生きる目的、目標の喪失が絶望感を生み出すのです。戦時中は戦争に勝つこと。戦後の高度成長期には、右肩上がりの経済の中で貧しかった日々の暮らしが豊かになること。これを目指して誰もが明確な生きる方針を持ち、苦しくても必死に働けば良かった。ところが現在、明日のパンを心配する必要は無くなり、生

き方も価値観も自由で多様になりました。生き方が自由で多様であること自体は素晴らしいことですが、自由であると言われた時には、自分で目標を定めないと何処を目指してよいか解らなくなります。自由の持つ不自由さです。この“不自由さ”に戸惑う学生たちを、私は沢山見ます。自分の将来像を明確に描けず、悩む学生。そして焦りと共に、周囲の動向に急かされるように就職活動に突入する学生。そこには、“生きがい”や“働きがい”は見えません。そんな彼らに一番欠けているのは、「好きなことをやっけて行こう」という視点です。そうです。それは、先にも触れましたが、まさに星野道夫自身がもがき苦しんだ未辿り着いた心境なのです。このような学生たちに、星野道夫の写真やエッセイはとても眩しく新鮮に映るようです。ある種の驚きと共に、目から鱗が落ちるような衝撃を語る学生もいます。では何故星野道夫の作品は、彼らにそのような影響をもたらすのでしょうか。一つは、彼のエッセイに描かれた「生き方の多様性」だと考えます。星野道夫は、アラスカで交流のあった多くの友人たちの生き様について書いていますが、描かれたどの人生も圧倒されるような個性で光り、それらはどれも一般の尺度からは外れ、同時にとても魅力的です。そこには多様な価値観に裏付けられた明確な人生があります。

例えば『旅をする木』に描かれたビル・フラー。彼は70歳を過ぎても水道の無い暮らしを続け、多くを持たない生活をしています。高齢になってから日本語を学び、北海道から九州までの自転車旅行を楽しみ、その一方でカリフォルニア大学で植物病理学の修士号を修め、しかし世間に評価されるような肩書はもたず、幼稚園でのボランティアなどをしながら自分の人生を肯定し、飄々と生きています。そんな彼を、星野道夫はこのように評します。

世界が明日終わりになろうとも、私は今日リンゴの木を植える……ビルの存在は、人生を肯定してゆこうという意味をいつもぼくに問いかけてくる。（星野 2003：旅をする木：星野道夫著作集3巻）

例えば『ノーザンライツ』に描かれたウィリアム・ビル・ブルーイット。彼は、1960年代初めアラスカの大地を核実験場にする計画「プロジェクト・チェリオット」の危険性を訴え、それが故に故国アメリカを追われた動物学者です。どんな迫害にあっても正しいと信じた自分の主張を貫き通し、結果、辛酸な人生を余儀なくされました。しかし、最後の最後に米国政府は自身の非を認め、彼に謝罪をしています。星野道夫はビルの人柄について、友人のシリア・ハンターの言葉を引用し、次のように述べています。

「どうでもいい常識は何も持ち合わせていなかったけれど、アラスカの自然に誰よりも魅了されていた。そして、極北の生態学に関して彼の右に出る者はいなかったのに、ビルはアカデミックな世界が嫌いで、フィールドにいる時が一番幸福だったと思う。そんな変わり者のビルを、学生たちは友達のようにしたっていたのよ」（星野2003：ノーザンライツ：星野道夫著作集5巻）

同じく『ノーザンライツ』に登場するシリア・ハンター。彼女は女性でありながら米軍パイロットという特殊な経歴を持ち、退役後はマッキンリーの麓に山小屋を営みながら多くの登山者を支援しました。同時に、ウィリアム・ビル・ブルーイットらと共に「プロジェクト・チェリオット」を阻止するなど、アラスカの自然を守るために奔走した人です。女性初の全米自然保護協会会長になった彼女は、星野道夫の親しい友人でした。シリアの言葉に、「Life

is what happens to you while you are making other plans. (人生とは、何かを計画している時起きてしまう別の出来事。)」という一節があります。人生のある一面を言い当てたこの言葉を、星野道夫はしばしば引用していました。

例えば、『イニユニック』（星野 2003：イニユニック [生命]：星野道夫著作集 2 巻）に描かれたドン・ロスやチャーリー・オットー。前者は、アラスカの大地に人や物資を小型飛行機で運ぶブッシュパイロット。後者は、80歳を過ぎてなお、グズリという動物をカメラに収めようとアラスカをさ迷い歩く動物写真家。二人と星野道夫の心の友人です。

そして何よりも、星野道夫の生き方。これらの多様な人生に触れたとき、学生たちは、「ああ、これでもいいんだなあ」というある種の安心感に包まれます。ここで感じる安心感は“人と違う自分”の肯定に繋がり、それはやがて“生きがい感”を生み出す源泉になるのです。つまりは、自分の中にある人とは違う個性を、自分自身が許し、受け入れられるようになる、ということです。それは同時に、ウエルネスレベルの向上に繋がると考えられます。

「Personal definition of success (成功の個人的定義)」つまりは、自分の人生の成否は社会の評価ではなく自分の価値観で決める、という意味でしょうか。星野道夫はビル・フラワーの人生に、この言葉を当てはめています。自分の未来がよく見えなかった学生たちは、星野道夫に触れたときこのような価値観の存在に気づき、かすかに芽生えた希望の下に自分の人生を再考し歩き出すようです。

もちろんエッセイだけでなく、星野道夫の写真にも彼らは感銘し影響を受けます。星野道夫の写真の素晴らしさに関しては、改めて私が語る必要もないでしょうし、薄っぺらな言葉で飾れるほど浅いものでもありません。アラスカの自然の中であって、親子で戯れるグリズリー、

安らかな表情で眠るホッキョクグマ、幻想的な風景を彷徨うカリブー、大海を躍動するザトウクジラ。そして、アラスカに息づく目を奪われるような自然や、そこで暮らす人々。そこには、学生たちが想像すら及ばなかった世界の広がりがあります。彼らは、このような写真を目にして、“もう一つの時間”を感じるようです。星野道夫は『旅をする木』の中に「もう一つの時間」と題する章を設け、我々が都会で生活しているその時に、アラスカの自然や動物たちにも同じ時間が流れている、その当たり前の事実の再発見を瑞々しい文章で綴っています。具体的には、次のような女性編集者のエピソードが語られています。彼女は忙しい都会での仕事の合間に休暇をとって、一週間だけ星野のザトウクジラの撮影に同行します。そして都会の喧騒が頭から離れないすぐ翌日、大海原にジャンプする巨大なクジラを目撃し絶句するのです。

「東京での仕事は忙しかつたけれど、本当に行って良かった。何がよかったかって？それはね、私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない、それを知ったこと……（後略）」(星野 2003：旅をする木：星野道夫著作集 3 巻)

こう語る彼女のエピソードを紹介しながら、星野道夫は次のように記します。

ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、こころの片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地のさほど大きい。(星野 2003：旅をする木：星野道夫著作集 3 巻)

目の前の慌しい生活が自分を飲み込みそうになった時、実はそれが世界の全てではなく、ちょっと心の中の目を凝らせばアラスカに野生動物たちが瑞々しく息づいている。自分の存在を空から俯瞰し、相対化するような視点。そんな“もう一つの時間”は、ふーっと大きく息をして肩の力を抜くような安心感を私たちに与えてくれます。それは、同時に私たちを強くしてくれることに他なりません。学生たちは星野道夫の写真に接し、この女性編集者と同じような“もう一つの時間”を感じ取るようなのです。アラスカにある“もう一つの時間”を、疑似体験するようなのです。

以上は、星野道夫をテーマにした永年の講義における学生の感想文、学生との議論などから私が考察したことです。そしてこのような影響は、なにも若者だけに限ることではなく万人に当てはまることではないかと思えます。もちろん、このような力を持つのは、何も星野道夫の文や写真に限らないでしょう。しかし少なくとも星野道夫は、慌ただしい日々を送る私たちに安堵感や生きがい感をもたらし、結果、現代社会を生きる我々のウェルネスレベルを上げてくれると思うのです。

Ⅲ. 星野道夫のスピリチュアリティ

ここでは、星野道夫の示したスピリチュアリティに関して論じてみたいと思います。ところで、スピリチュアリティとは何でしょうか。靈魂の存在とか、生まれ変わりなどといった現象でしょうか。あるいは、悪霊とか靈感商法とか、そういうネガティブなイメージを思い浮かべる人がいるかも知れません。しかしそのようなネガティブな事象は、スピリチュアリティの本質とはまったく無縁のものです。もし仮にそれがスピリチュアリティに関わるものだとしたら、星野道夫は、そのような事象とは一切係わ

りを持ったことがなく、またその類のものからは最も遠く離れた存在でした。

語源を辿れば、スピリチュアリティという英語はもともとラテン語の“スピリトゥス（spiritus）”に由来し、このラテン語は“スピロー（spiro）”という「呼吸する・生きている」「靈感を得る」「風が吹く」などの意味を持つことばでした。意味に広がりがある言葉ですが、命や霊そして自然と関連がありそうなイメージを持つ言葉です。では、現在私たちが使っている「スピリチュアリティ」とはなんでしょう？

これまでに宗教や医療、健康科学や心理学を中心に様々な分野で研究されてきたスピリチュアリティですが、実は、この問いに対する標準化された明確な答えはありません。しかし多くの研究者の共通見解として得られている解釈はあります。それは、「スピリチュアリティとは、従来から使われてきた宗教という言葉から、その組織や制度としての側面、つまり拘束的、排他的、教条的な部分を取り除いたもので、同時に宗教の本質、あるいは色々な宗教にみられる普遍的な部分を統合したもの」という解釈です。要するにスピリチュアリティとは、ごく大雑把に言えば、多くの宗教が説明している宇宙の成り立ち、超越的存在（神）との繋がり、生きる上での規範などの共通部分を要約したもので、同時に宗教が持つ負の側面、すなわち他の宗教を否定したり、独自の観念体系や教義を強要したり、という拘束的な部分を取り除いたものと言えるでしょう。従って、先ほど触れた悪霊とか靈感商法などは、スピリチュアリティはまったく無縁な存在です。それらは、ある意図をもった人間がスピリチュアルな現象を利用して作り出した人為的な解釈や行為に過ぎません。スピリチュアリティとは、むしろ人間が普遍的にもつ己の存在の意味や価値を問う行為や、人知を超えた大いなる存在を認識し、それに対し畏敬の念を抱くことなど、人間ならで

はの深遠な特質と捉えることが出来ます。悠久の時を超えて繰り返される大自然の営みに畏怖を覚え、樹木や動植物、更には山や川や風などにまである種の神性を感じ取る。そんな営みこそ、スピリチュアルな感性の顕われと見る事ができるのです。

この本来の意味から考えれば、自然の中に身を置きその営みと調和しながら生きた星野道夫という人は、多分にスピリチュアルな人だったような気がします。星野道夫が表現したものは、写真という目に見える媒体を使いながら、実はその背後に隠された目に見えない本質であったように思えるからです。また、多くの研究者が指摘するようにスピリチュアリティの構成概念のなかには「自然」が含まれます。世界中の先住民族が持つ土着信仰をみると、それらは共通して自然崇拝を基本としており、そこにはアニミズムにみられるような思想、すなわち自然界の全ての存在に神が宿るとする思想が根底に流れています。日本人のスピリチュアリティを論ずるうえでしばしば引用される鈴木大拙の『日本の靈性』(鈴木 1972)の中にも、また海外の多くのスピリチュアリティ研究の中にも、自然とスピリチュアリティの結びつきを示す多くの事例がみられます。このように、スピリチュアリティは自然と密接に関わる概念であり、更には、自然の中に身を置くことでスピリチュアルな感性が養われるとする研究結果もあるのです。(濁川 2012) 星野道夫はアラスカの大自然の中でスピリチュアルな感性を研ぎ澄まし、目に見えるものの背後にひそむ目に見えない本質を感じ取る能力を授かったのでしょうか。その結果、星野道夫の中には、在るがままの自然に寄り添い、自分と自然の間に明確な境界を作らないという自然観が育まれました。この星野の自然観は、『ナヌークの贈りもの』そして『イニユニック』の次の一文に如実に表されています。

われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。(星野 1996：ナヌークの贈りもの)

目の前のスープをすすれば、極北の森に生きたムースの体は、ゆっくりと僕の中にしみこんでゆく。その時、僕はムースになる。そして、ムースは人になる。(星野 2003：イニユニック [生命]：星野道夫著作集2巻)

このような自然観を有したからこそ、星野道夫は、写真家の今森光彦氏が評するところの、「被写体に対する愛情と敬意に満ちた写真」を撮ることができたのだと思います。(星野 2012：今森光彦：命を撮るといふこと。悠久の時を旅する) そうです。星野道夫という人は自然と自分の間に境界を設けないという意味で、多分にスピリチュアルな表現者だったのです。従ってここでは、いくつかの評論を基にして、私が嗅ぎ取った星野道夫のスピリチュアリズムに関して述べたいと思います。

学童期の星野道夫が、自然やその中で暮らす野生動物に強い興味を抱いていたことは既に述べましたが、この頃は特にスピリチュアルな言動をみせた訳ではありません。彼が随所に示すその深いスピリチュアルな感性は、アラスカの自然の中で暮らすことで培われたものでしょう。特にエスキモーやインディアンなど先住民との深い交流の中で、アニミスティックな彼らの生き方、つまり自然との調和の中で“生かされている”とする彼らの姿勢が、星野道夫のスピリチュアルな思考に大きな影響を及ぼしたと考えられます。それらの代表的な事例としては、アサバスカン・インディアンのシャーマンであるキャサリン・アトラスとの川旅や、彼女と共に参加した御霊送りの意味を持つ伝統的儀

式の祝宴「ポトラッチ」の体験、さらにクリンギット・インディアン語り部であるボブ・サムとの旅、またクリンギット・インディアンの古老であるエスター・シェイや、一族のリーダーだったウイリー・ジャクソンとの交流などが挙げられます。この他にも星野は多くの先住民や特にその古老たちとの親密な交流をもち、その過程でスピリチュアルな感性を研ぎ澄ませていったのだと思います。またそれは、常に死と隣り合わせの生を営んでいるアラスカの野生生物をつぶさに観察することから身についた感性かも知れません。人間の力では抗うことのできないアラスカの熾烈な自然の中での生活は、自ずと人を謙虚にし、思想や発想にも影響を及ぼしていったものとも思われます。このような過程を経て、やがて星野道夫は「神話の時代に生きた人々と同じ視線」をもってみたいと願うようになり、同時に「目に見えないものに価値を置くことができる社会」に強く惹かれるようになったのでした。実際、1994年に行われた講演「南東アラスカとザトウクジラ」の中では、星野は次のように語っています。

『私たちは神話というと、バカバカしい、ちょっと時代錯誤的な作り話だと思ってしまいうわけですけども、実は神話というのは強い力を持っているのではないか。今はもう宇宙に行ける時代だし、自然科学というものが非常に発達して、私たちがいったいどういう生き物であるのか、何であるのか、少しずつ解明されてきていると思います。しかし、そういった科学の知恵が、なぜか自分たちと社会との繋がりを語ってくれない気がするんです。どんどん自分の事が世界と切り離されて、対象化されてゆくような気がする。月に行けるようになったり、自然科学が発達してきても、自分たちの精神的な豊かさが無くなってゆくよう

な気がして仕方ありません。つまりもしかしたら、自分たちを世界の中で位置づけるために私たちは、どこかで神話の力を必要としているのではないかと、私は今思っています。』（星野 2003：魔法の言葉）

実際に星野は、北米のインディアンやエスキモーが共通して持つワタリガラスの神話に興味を抱き、神話のルーツを求める旅を始めました。それは、文芸評論家の湯川豊氏が指摘するように、「私たちの文明社会が、安らぎと自信をもたらしてくれる物語をすでに失っている」現状を憂慮した星野が、「あらゆる自然にたましいを吹き込み、もう一度私たちの物語を取り戻そう」と試みる旅だったのでしょう。（湯川 2003：一粒の雨を見よ。ユリイカ詩と批評、2003年12月号）このように、星野道夫はアラスカの大自然の中で生きることや、そこで暮らす人々との交流の中から自身のスピリチュアリティを育てていったのです。

星野道夫の著作は、写真集、エッセイを合わせて20点以上にのぼります。決して多いとは言えませんが、写真家・作家としての活動期間が15年程度であったことや、作品を産み出すためのベースがアラスカの野外フィールドであり、キャンプに多大な時間を費やしたことを考えれば、それは旺盛な執筆活動の足跡として見る事ができます。

比較詩学を専門とする菅啓次郎氏は、星野道夫の作品を評して「この人は、一種の死後の視線、墓の彼方からの視線を持って人間の世界を見ることができた」としました。（菅 2003：動物によるテクノロジーのほうへ：ユリイカ詩と批評、2003年12月号）それは、星野がアメリカ・インディアンのいう「七世代の掟」、つまり七世代後の時代を考慮して現代の行動規範を決定したような、悠久の時間感覚を身に着けていたという評価です。アメリカ・インディアン

のとある部族は、重要な物事を決する場合、その決定が七世代先の人々にどのような影響を及ぼすかを考えて結論を出すそうです。仮に一世代30年とすれば、七世代先とは、ざっと考えて200年先。ひるがえって今の私たちは、何年先を見据えて物事の選択をしているのでしょうか。今日明日のことしか見えず、自分を中心とした世界の損得勘定で事を決する社会風潮、半永久的に猛毒の核廃棄物を残す原発、砂が溜まり構造上100年はもたないダム、復元を前提としない森林伐採。事例を挙げたら切がありません。そんな現状を考えれば、この「七世代の掟」とは、なんと謙虚で責任感のある思想なのでしょう。星野道夫は、この時間感覚の中で写真を撮り、文を書きました。確かに、彼の足跡を辿ると悠長な時間間隔に繋がるもの、例えばネイティブの古老たちが持つ古い知恵に学ぶ姿勢と、それを次世代に引き継ぎ、同時にアラスカの稀有な自然を未来の子供たちに継承しようとする姿勢が見てとれます。この悠長な時間感覚を身に着け、その上で、星野の文章と写真は、「神話」を媒介として結合していると菅氏は述べています。同時に、星野道夫は、神話の思考を作り上げている特殊な空間で写真を撮り、神話の語られているのと同じ空間で現代の散文を書く」と評論しています。

宗教人類学を専門とする中沢新一氏は、星野道夫の写真を評して、「こちら側のハンターとして動物を見ていない。普通の動物写真家みたいに、動物をショットして、そのまま帰って来たりしない。ちゃんと自分の行為を償うために、動物たちとの関係を幻想の中でも保ち続けようとして、神話の世界に送り返す「イヨマンテ」までやろうとしていた。」としています。(中沢2003: 動物によるテクノロジーのほうへ: ユリイカ詩と批評, 2003年12月号) 因みにイヨマンテとは、日本のアイヌ民族や北米の先住民が持つ宗教的儀礼の一つで、動物を神の化身とみな

し、その霊を神の国へ還す狩猟祈願の儀式です。

先にも引用した湯川豊氏は、星野道夫がくりひろげた物語を、一口で言えば、彼が惹かれたのは「目に見えないものに価値を置くことができる世界」であり、星野はその世界を体現している。つまり、今なお神話の世界を心身のうちに持っている人々と同じ視線でアラスカの大地を見ようとしたのだった、と評しています。(湯川 2003: 一粒の雨を見よ. ユリイカ詩と批評, 2003年12月号)

既に述べましたが、星野道夫は亡くなるまでの最後の数年間、多くの北米先住民族が共通して持つワタリガラスにまつわる神話のルーツを求めて旅を続けました。それは現代社会の核となるべきものを探す旅、つまり、神話の中に現代が必要とする何かを見出そうとする旅でした。作家の柳田邦男氏は、星野道夫のこの旅を「先住民の古老の言葉をヴィヴィッドにとらえ、現代の意味を問い詰める仕事」と評しています。(柳田 2003: 複眼の思索者. ユリイカ詩と批評, 2003年12月号)

これら多くの評論に示されるように、多様であった星野道夫の仕事のある部分は深く神話と関連し、同時に色濃くスピリチュアリティに彩られたものでした。

星野道夫は、先にも紹介した「ナヌークの贈りもの」という美しい絵本の中に、次のような一文を残しています。因みに、ナヌークというのはイヌイットの言葉で白熊を意味します。

われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。いつの日か、わたしたちは、氷の世界で出会うだろう。そのとき、おまえがいのちを落ととしても、わたしがいのちを落ととしても、どちらでもよいのだ。(星野 1996: ナヌークの贈りもの)

この神話の世界を映したような絵本が出版された半年後、星野はロシアのカムチャッカでヒグマに襲われ命を落とします。まるで、自分の死までをも予言するような物語でした。

さて、このように星野道夫はスピリチュアルな感性をもった表現者だったのですが、では星野道夫のスピリチュアリズムを特徴づけるものとは何でしょうか。私は自分の研究として、星野道夫全集から彼の全てのスピリチュアルな表現を洗い出し、文章の切片化、概念化、カテゴリー化を図ることにより彼のスピリチュアリティ観を分析してみました。（濁川 2015）辿り着いた結論は、星野道夫のスピリチュアリティは、【万物の繋がり】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在】という6つの要素で構成されるというものでした。この中でも、【古い知恵の継承】と【年長者への敬意】は、他で示されたスピリチュアリティ分析と比べ星野が持つ独特のスピリチュアリティ観でした。そういえば確かに星野は、どこに行ってもその土地の古老と親しくなり、彼らとの触れ合いをとっても大切に、そこから未来を照らす何かを学ぼうとする人でした。すでに記しましたが、没後20年経過してなお現在も、多くの日本人が星野道夫を支持し写真展に訪れます。その事実を考えると、星野道夫が示した人間像は、我々日本人のDNAに刻み込まれた本来あるべき姿の典型なのかも知れません。ここで得られた要素を総合して星野道夫のスピリチュアリティ観をまとめると、以下のような人間像が浮かび上がります。すなわち、自然との調和を重んじ、年長者や古い知恵に生きるべき方向性を仰ぎながら、物質を超えた目に見えない存在にも価値を見出し、多様性を認めつつも全ての存在が繋がっているというワンネスの思想をもち、輪廻という悠久の旅を続ける人間。

この人間像をもう少し具体化すると、どんな

人間になるのでしょうか。それは、当然と言えば当然なのですが、星野道夫のような人間と表現するのが一番解りやすいと思います。星野道夫はアラスカの大自然の中に在って、そのリズムと調和して生きました。年長者を敬愛し、継承すべきその知恵で七世代先の未来を考える人でした。物質的な満足よりも、シンプルで多少不便な暮らしの中に心の豊かさを見出す人でした。生物の多様性、文化の多様性、考え方の多様性を重視し自分と異なる存在を受け入れる人でした。そして、目に見えない大いなる存在や、非物質的なものの価値に思いを馳せる人でした。経済活動が優先され、物質的な価値観が偏重されがちな現代社会において、人々は地球環境の危機的な状況や、その他様々な格差や歪みを否応なく感じています。そのような社会にあって、人々は無意識のうちに、星野道夫が示したようなスピリチュアリティ観に未来の希望を託しているのではないのでしょうか。

最後に、誤解の無いように付け加えておきます。星野道夫がスピリチュアリティー辺倒の人であったと考えるのは、大きな間違いです。星野道夫の著作はすべてスピリチュアリティに結びつくわけではありません。特に初期の作品には、スピリチュアルな気配はほとんど感じられません。私は様々な読み方ができる星野道夫の著作の中から、スピリチュアリティに関わる部分に光を当て、みなさんに紹介しているに過ぎません。なぜなら、このスピリチュアルな感性こそが、今後我々現代人に必要とされる重要な価値観であり、星野道夫の遺言のように思えるからです。

星野道夫のスピリチュアルな側面に大きな影響を与え、同時に彼を神話の世界に案内したのは、クリンギット族のネイティブインディアン、ボブ・サムでした。彼は一族の古老たちから神話の語り手（ストーリーテラー）として選ばれ、クリンギット族に古くから伝わる神話

を世界各国の人々に伝えている人です。そのボブがしばしば口にする重要なメッセージに、「Don't be afraid to talk about spirit. (魂を語る事を恐るなかれ)」というフレーズがあります。星野道夫に近い人や、彼を敬愛してやまない人達の中には、スピリチュアルという言葉の持つネガティブなイメージで彼が誤解を受けるのを避けたいと願っている人達がいるのも事実です。そして、私自身もそう願います。しかし私は、このボブ・サムの言葉に勇気を得、敢えて星野道夫のスピリチュアルな側面を今後も語り継ぎたいと思います。それは、星野道夫のほんの一側面かも知れませんが、彼が伝えたかった重要な部分でもあったと考えるからです。

IV. 神話と星野道夫

スピリチュアリティを分析し、その概念構造を明らかにする過程では多くの場合神話的な側面が現れます。神話はスピリチュアリティを構成する重要な要素なのです。星野道夫のスピリチュアリティを分析した結果明らかになった6つの要素も、それぞれ世界中の神話の中で頻繁に取り扱われるテーマです。ところで、神話とはなんでしょうか。ご存じのように、日本にも『古事記』、『日本書紀』などに代表されるいくつかの神話が遺されています。それらの神話は残念ながら、今の日本人にとって身近な存在ではありません。しかし神話は、人々が迷える日常生活の中で、正しく舵をとる上でとても重要な存在だと私は考えます。法学者の竹田恒泰氏は、二十世紀を代表する歴史学者であるアーノルド・J・トインビーが、「子供の頃に民族の神話を学ばなかった民族は、例外なく滅んでいる」と述べていることを紹介しています。(竹田 2011) この言葉は竹田氏が指摘するように、「神話を学ぶことが民族存立の要件である」ことを示し、同時に現在の日本人が日本神話を学

んでいないことが、どれだけ大きな問題をはらんでいるかを教えてくれるものです。なぜ日本人は神話と疎遠になったのか。その理由はいくつかあるでしょうが、その一つとしてエビデンスに基づく科学偏重主義が考えられます。神話は、必ずしも史実に基づくものでなく多分に創作された物語であるから、信ずるに足りないとする考え方です。果たしてそうでしょうか。確かに日本神話の全てが歴史的事実だとは思えません。当然そこには、比喩や暗喩が散りばめられ、結果心に残るストーリーとして構成されているのです。しかしむしろ物語の方が事実よりも物事の本質を射止める、という事はままあることです。そして大切なのは、事実かどうかではなく、それが民族の価値観やアイデンティティを形成するうえで重要な発想の源になるという点です。かつて我々日本人の精神性には八百万の神を認める多様性や、全ての存在に神性を見出す自然観が流れていました。日本人に根付いたこの価値観は、古の神々の物語にその根源を観ることができるのです。例えば心理学者の安本美典氏は、『古事記』や『日本書紀』の神話をよむと、アニミズムを思わせる表現にしばしば出会い、記紀で活躍する神々には、自然神もあれば、植物神もあり、動物神もあれば、人間神もあると述べています。(安本 2016)

もう一つ日本人が神話から遠ざかった理由として、GHQが意図した戦後日本の統治政策があったと考えられます。非科学的で根拠がないという理由で神話を否定し教育の現場から切り離すことにより、民族の弱体化を図ったわけです。日本民族が神話の下に精神的絆を深め、軍国主義が再燃することを恐れたのでしょう。逆に見れば、それだけ神話の持つ力が大きいと言う事です。日本が軍国主義に向かうことなどは論外ですが、科学的でないとの理由で神話が否定されるのは不思議な話です。諸外国の例をみても、ギリシャ神話にせよ旧約や新約の聖書に

ある物語にせよ、神話はどれも史実を忠実に語っているわけではなく、それでも民族のアイデンティティを形成する重要な存在になっているのです。

アメリカの著名な神話学者ジョーゼフ・キャンベルは、神話には次のような役割があるとしています。すなわち、神話は宇宙の成り立ちを説明し、自分が何者であるかを教えている。神話は、神秘的な物の前で謙虚になり畏怖の念を抱くことを教えている。神話は社会秩序を支え、どんな状況の中でも人間らしく生きるためには、どうすべきかを教えている。その上で彼は、「私たちは、今日、自然の知恵と元通り和解することを学ばなければなりませんし、動物と、そして水や海とも兄弟であることをもう一度見直すべきです」と述べています。（キャンベル.J、モイヤーズ.B 2010）。そして星野道夫自身は、とある講演の中で神話に言及し、次のように述べています。ちょっと長いのですが、彼の神話に対する考えが良く表れているので、そのまま引用します。

「ポイントホープという村に私がとても好きな神話があります。それはちょっと長い神話なので全部うまくは話せないんですが。ある晩イグルーの中で家族が過ごしていて、ふと見ると若者の息子がトランス状態になっているんですね。つまり意識がなくなって、ボーっと座っている。それを家族の者が見ていた。やがてその息子は意識が離れて行って、いつの間にか自分がクジラと一緒に旅をしている。自分の身体もクジラになってしまって、クジラと一緒に旅をしながら少しずつクジラの気持ちがかかっていく。その時に、ある長老のクジラが彼に言うんですね。春になったら自分たちはポイントホープの村の近くを通過して、北極海に泳いでいく。その時にお前が呼吸

をすると、海面からエスキモーのウミアックを見るだろう。お前は誰に銛を打たれなければならないのかを、自分で選ばなくてはいけない、と。そして、真っ白なきれいなウミアックを選べと言われるんですね。つまり、ウミアックをそういうふう綺麗に保っているエスキモーはきっと自分たちを捕ったときに、大切に肉を村人全員に分け与えよう……。

そういう話を幾つもするんですね。つまり自分たちが誰に銛を打たれか、それをその長老に教わる訳です。うまく説明できないんですが、私はこの話がすごく好きなんです。

昔からポイントホープ村に伝わるクジラ猟の神話というものを、人々が信じていたかということ、それはそうじゃないと思うんですね。クジラが人間にそういうことを教えるなんて、彼らは決して信じていなかったと思うんです。ところが、神話を通してやはり自分というものを世界に位置づける。それは、とてもいい方法だったと思うんです。神話は、そういう力を持っている気がしてなりません。その中で非常に大きな意味を持つのは、“抑制”ということだと思うんです。どこかで自分を抑制していく。それがタブーとか、そういう世界と繋がっていくのかもしれないけど、神話というのは、そういう力を持っているような気がしてなりません。

そうやって考えたときに、私たちが今、どんな時代に生きているかを考えると、本当にいろんなものが便利になって、テクノロジーとかそういうもので、どんどん新しい世界に入っているけれども、同時に非常に大きなものを失ったというのは、こういった神話、自分たちの神話というものが、もはや無い。そのことがやはり非常に

何か不安というか、自分たちをどうやって世界や宇宙の中で位置づけていいかわからないのではないか、という気がしてならないんですね。」(星野 2003：魔法の言葉—星野道夫講演集)

この星野が好きだった神話には、先住民の社会に根付く人間とクジラとの、言い換えれば人間と自然との、ある種の契約に基づいた共生関係、相互の敬意に基づいた調和の関係が示唆されています。ややもすると自然との調和を欠き、テクノロジーだけが暴走しそうな現代社会において、そうした動きを抑制し、羅針盤のように自分たちの立ち位置を確認するための拠り所として、神話が重要だと星野道夫は述べているようです。そして、その暴走を抑制するために重要なことは、我々が恐れと畏怖の念を思い出すことではないでしょうか。星野道夫は、しばしば以下のワタリガラスの神話を引用します。

ワタリガラスはふと考えた。人間が恐れをもつ何かを造らねば、この地上にこしらえたすべてのものを、いつか滅ぼしてしまうに違いない。

ワタリガラスは一頭のクマを形づくり、そこに命を吹き込んだ……。 (星野 1994：アークティック・オデッセイ—遙かなる極北の記憶)

そして同時に、次のような感想を述べています。

もしもアラスカ中にクマが一頭もいなかったら、僕は安心して山を歩き回ることが出来る。何の心配もなく野営できる。でもそうなったら、アラスカは何てつまらないことになるだろう。

人間はつねに自然を飼い慣らし、支配しようとしてきた。けれども、クマが自由に歩き回るわずかに残った野生の地を訪れると、ぼくたちは本能的な恐怖をいまだに感じることができる。それは何と貴重な感覚だろう。それらの場所、それらのクマは何と貴重なものたちだろう (小坂・大山 2006)。

星野道夫は我々現代人が神話を持つことによって、“抑制”と“畏怖の念”を携えることを願っていたようです。この“抑制”と“畏怖の念”を大切にしたい、先住民がいました。彼らが示した「未来を見通す力」について、星野道夫は書き記しています。少し長くなりますが、ここに紹介したいと思います。それは、「アラスカはいったい誰のものか？」という問いに集約されたアラスカの土地所有権を巡る問題と関わります。

アラスカ原住民のインディアンやエスキモーにとって、「土地を所有する」という概念は、もともと有りませんでした。土地とは、そこは誰もが自由に行き交うことができる大地で、境界線を設けず暮らすことができる「自然の恵み」そのものだったのです。ところが、このアラスカの土地で油田が発見され、またそこにダム計画が提案されるなど経済的価値が高まると事態は一変しました。そこに住んでいた原住民とはまったく無縁な所で、この土地の所有権を巡る議論が起こったのです。やがてそれは、当然のことながら原住民や自然保護団体も巻き込んだ大論争となり、1971年に新たな土地制度である「原住民土地請求権解決法」の成立という決着をみます。有史以来無限の広がりを見せていたアメリカ最後のフロンティアに初めて線が引かれ、個人が一定の広さの「所有地」というものを持ったのです。この新制度に参加した部族には、一定の土地と高額な補助金が与えられ

る事になりました。人々は浮かれ、この話しに乗りました。しかし、やがてこの新制度は様々な問題を引き起こすこととなります。すなわち、不要の土地の売買、現金収入による生活スタイルの変化、それに伴う伝統的文化の喪失、老人と若者たちジェネレーションギャップ等々。ところが驚くことに、誰の目にも魅力的に映ったこの新制度に参加しない人々がいました。それは、アーケティックビレッジに住むグッチンインディアンという部族でした。星野道夫は、この選択について次のように述べています。

人々は、新しい時代の中で、昔ながらの土地の持つ意味を選択したのである。言い換えれば、自然の恵みという、もう一つの豊かさを選んだのだ。（星野 2003：ノーザンライツ：星野道夫著作集 5 巻）

そして彼は、この人々が持っていた、まるで「未来を見通すような不思議な力」の存在に強い興味を抱き、この土地を訪れます。村人たちは、星野に語りました。

「ああ、そうだな……大切なのは、お金ではなくて、昔からの暮らしをこの土地で続けられるかどうかだからな……」

「みんなで話し合っただけで決めたのさ…村の年寄りたちも一緒にな……これからの未来の孫のたちのことを考えると、何となく、それが一番いいような気がしたのさ」

「人間が生きのびてゆくために一番大切なのは怖れという感覚をもっているかどうかだと思う。グッチンインディアンの世界で昔、それは飢餓のことだった。が、今は少し違うと思う。もっと大きな、自然に対する畏怖のようなものだ……」（星野

2003：ノーザンライツ：星野道夫著作集 5 巻）

星野道夫は、この時の感想を、「ほくがこの村に魅かれるのは、人々がもちえた、“何かがおかしい”、“やっぱり止めようか”という未来を見通したその力がここにあったからだ」と述べています。（星野 2003：ノーザンライツ：星野道夫著作集 5 巻）

それはまさに、“畏怖の念”と“抑制”が働いた結果に他なりません。グッチンインディアンは、アサバスカ系の部族で神話を携えたカリブーの民です。もちろん、この問題に直接神話が働いたとは思いません。ただ、神話をもち、畏怖の念を心のどこかに忍ばせていることが、未来を見通す重要な力に成り得たと思うのです。星野道夫は、それを伝えなかったと思うのです。

映画『地球交響曲第3番』で星野道夫を取り上げた映画監督龍村仁は、やはり神話の重要性を訴えながらも、少し別の角度から神話を捉え以下のように述べています。

自分の命は自分だけの所有物ではなく、目に見えない大いなる命の繋がりの中で生かされている、というあの記憶を呼び覚ますために、神話はあるのだ。その意味では、科学技術の進歩した今日でも、神話は、人間が正しく生きて行くために必要なものだ。

そして、

何をもって、神話というのか、どんな神話が必要なのか、は時代によって、時・場所・個人によって違ってくる。いや、違った方が良いと思う。その意味では、古来からの神話が、変わることなく継承される必要は必ずしもない。（龍村 2003）

私は、この龍村仁監督の考えに深く共感します。日本人が、なぜ神話から遠ざかってしまったのか。その歴史的背景はとりあえず置くとしても、やはり私たちは星野道夫が探したように、自分の魂の支えとして新たな神話を創造し、心の拠り所とする必要があるのかも知れません。そもそも星野道夫という人は、初めから神話の世界に生きていた人のような気がします。子供のころから、北海道の熊の生態をイメージしながら生きていたような子供など、いるのでしょうか。そして彼は、神話のような物語の中で熊と対峙して、悠久の旅に発ちました。その一生を通じて、星野は、私たちが私たちなりの神話を紡ぐための道標となる数多くのメッセージを遺してくれたのです。龍村監督の言うように、必ずしも古来から伝わる物語でなくても良いと思います。もちろん、天地創造や神々の営み、そして皇室誕生へと連なる日本神話に込められたメッセージを正しく読み解き、それを民族の精神の礎にできるなら、それに越したことはありません。私もそのように願います。しかし諸々の事情でそれが叶わないならば、我々一人一人がそれを創り出すことが必要なのかも知れません。そして、そこに込められた祈りの本質が共通するものであるならば、物語そのものは、万人に共通のものでなくても良いのではないのでしょうか。

私たちは、時として大きな理不尽に翻弄されながら生きることを強いられます。先の東日本大震災などはその象徴でしょう。突然訪れた悪夢の数々。愛する人や地域の喪失。苦勞して築き上げた繋がりや絆の崩壊。夢見て培ってきた未来の消失。震災以外でも、日常に訪れる予期せぬ事故や病気。世界に目を向ければ、個人の力では抗う事すらできない紛争や、貧困。もちろん人生は大きな喜びや希望にも満ちてはいるのですが、時として私たちは、不条理の海を

泳ぐ小さな魚のようです。そんな無力な私たちに、科学やテクノロジーは生きる意味を解り易く語ってはくれません。理不尽を受け入れるための救いにもなり得ません。しかし星野道夫の言葉は、そんな人間が、それでも精一杯生きることの意味を教えてくれるような気がします。無常で不条理に思える数々の出来事を、受け入れるための物語を語ってくれるように思えるのです。悩みを抱えながらもふと見上げた満天の星空が、理屈を超えて大きな癒しになるように。

私は今、星野道夫の遺した言葉を題材として、未来を照らす自分なりの物語を創ることをみなさんに提案したいと思います。

V. 星野道夫が示す現代社会の道しるべ

星野道夫を一言で形容するならば、もちろん写真家ということになるのですが、それと同時に彼は文筆家、そして冒険家という顔も持っていました。冒険の部分に関して、星野はあまりにも自分の足跡を淡々と記しており、あくまでも写真撮影や文章を書くための手段、あるいは移動の過程としての意味しか与えていないように見えます。しかし、作家の池澤夏樹氏も指摘するように彼が辿ったフィールドは時に命の危険までもたらすような過酷な場面の連続であり、その旅は、かの植村直巳をも彷彿とさせる冒険行だったのです。例えば、厳冬のマッキンリー山群に単独で入り、マイナス50℃という想像を絶する場所で一月以上も過ごしています。また、複雑に入り組んだグレイシャーベイの水路をカヤックで巡り、満潮時にしか現れないとされる伝説の水脈を探り、それを辿る旅などは帰れなくなる危険性を星野自身も認識しており、もう冒険そのものです。時に命の危険も伴うような行程を、しかし星野は決して自慢することもなく、何もなかったように

一人で平然と行くのでした。彼の写真や文章が私たちの心に響くのは、きっとそんな彼の人物も影響しているのでしょう。

文明が自然との調和を度外視して、無軌道に膨張してゆくようにしか見えない現在、星野が遺したメッセージは、相対的にいよいよその輝きを増して行くようです。地球環境が危機的な状況を呈し、貧困や格差など資本主義経済システムの行き詰まりから生まれた諸問題が山積する現代社会において、私は星野道夫のような存在こそ、最も必要とされるものではないかと思うのです。問題の本質を鋭くえぐり、それを世に問う学者や評論家は数多くいます。もちろん、彼らの研究や提言は重要です。しかし声高に正論を振りかざしてみても、それらの言葉は一時的に熱い感情を発散することはできても、相手の心にどれだけ説得力を持って響くのか。ふと、そんな疑問を抱かせます。星野道夫は、現代社会が持つこれらの矛盾や問題に関して、強い主張や何か際立った提言をしたわけではありません。しかし彼はアラスカ社会に見られる様々な問題に関して、客観的にその実態を見据え書き残しています。そして、彼はそれらの矛盾や問題を声高に批判するのではなく、未来に遺すべき稀有な自然や人の営みを写真や文章で我々に伝え、結果、問題の本質を浮き彫りにするという手法をとったのです。星野道夫は、“静けさが持つ力”を我々に教えてくれます。小難しい理屈で人生を説かれるよりも、年輪を重ねたブナの大樹の前で我々は自ずと頭を垂れます。物言わぬ自然は、静かなだけで、実は多くのことを私たちに語りかけているのです。星野道夫という人は、この“自然と同じ手法”で私たちに語りかけました。そして、この“静けさ”こそ、時に大きな力を持つと私は考えるのです。

ぼくはハイダ族の神話“ワタリガラスと最初の人々”の最後の章を思い出してい

た。人々の暮らしは豊かとなり、文化は栄え、その後に続く物語だった。

“……何かがもう終わりに近づいていた。村は捨て去られ、廃墟となり、人々は少しずつ変わっていった。海はその豊かさを失い、大地は荒れ果てていった。おそらく時が来たのだろう。ワタリガラスがもう一度この世界を作り直す時が……”（星野2003：森と氷河とクジラ：星野道夫著作集4巻）

これは、星野道夫が現代社会に“ハイダ族の神話”を重ね合わせ、感じている憂いです。ワタリガラスがこの世界を作り直す時が来ないために、すなわち、現代のこの危機的状況を乗り切るために、我々は何を成すべきなのでしょう。私は人間の価値観の転換だと思います。物質的繁栄だけを追い求め、大量生産、大量消費、大量廃棄を繰り返すような生活スタイルを続けていけば、地球が生き物たちを養いきれなくなることは明白で、そんなことは、もうみんな知っている。そう、みんな解っているのです。それでも、なかなかこれまでのスタイルを変えることはできない。何故か。それも簡単で、今の便利な生活を捨て切れないから。そして、今のままのシステムの方が儲かるから。そうです、目先の利益や便利さが優先して、次世代やその先をも見据えた長期的な思考ができないからなのです。この成り行きを変えるためには、人間の価値観が変わるしかないでしょう。

人生において、“何が大切”だと考えるか。つまり、生きる上での価値観。そして、その価値観の主役となるのがスピリチュアルな発想、特に全ての存在に魂が宿り、すべては繋がっているとするトランスパーソナルな価値観だと私は考えます。トランスパーソナルとは簡単に言えば、「トランス」超える、「パーソナル」個、すなわち「個を超えて全てが繋がる」という意

味で、これは、星野道夫のスピリチュアリティを分析する過程で得られた「万物の繋がり：ワンネス」に通じる発想です。古来日本神道や、世界中の先住民族にみられるアニミスティックな思想には、そのようなスピリチュアルな考え方が根付いていました。そして、星野道夫の文章や写真は、多分にスピリチュアルな感性に溢れ、私たちの潜在意識に眠るトランスパーソナルな感覚を呼び覚ましてくれるのです。すべての存在は繋がっている。龍村仁の言う、花や樹や鳥たちと私たちは繋がっている。土や火や風とさえ繋がっている。そうであれば、自分自身に他ならない他者を簡単に傷つけることはできない。差別することも、いじめることもできない。結局星野道夫の作品が無言のうちに私たちの心に訴えるのは、自然との、そして他者との繋がり的重要性だと思います。万物の繋がり、ワンネスという思想。しかも、その考えを声高に主張しない。その時はじめて、メッセージは他者の魂に響くのかも知れません。星野道夫の作品は、そんなことを私たちに教えてくれるようです。では、価値観の変容は可能でしょうか。私は可能だと信じます。通常、人間の価値観は時代の流れや社会の動向を反映し、徐々に変化するものです。しかし、何かの出来事を契機に一気に変容することもままあります。例えば、東日本大震災を切っ掛けに、日本人の価値観が変わったとする研究報告は多数あります。最初に記したように、多くの日本人が星野道夫に深く共感している事実は、我々の潜在意識の中に星野道夫と同じ感性や価値観が眠っていることを暗示するものです。それは、何かのきっかけで容易に顕在化する可能性があるのです。

「アラスカが今後どうなってゆくかは、20世紀末に残された人類の最後の期末試験のような気がする」というのが星野の口癖だったそうです。21世紀を迎えた現代、我々は果たしてこの期末試験に合格することができるのでしょうか。

か。星野道夫の思想に魂の拠り所を求め、我々一人ひとりが自己のアイデンティティを築くための物語を紡ぐこと。それは、この期末試験にパスするための答えの一つかも知れません。

引用文献

- 濁川孝志 (2017). 星野道夫の神話. コスモスライブラリー
- 星野道夫 (2003). 星野道夫著作集3. 新潮社
- 星野道夫 (2003). 星野道夫著作集5. 新潮社
- 星野道夫 (2003). 星野道夫著作集1. 新潮社
- 龍村仁 (2003). 地球交響曲第三番 魂の旅. 角川書店
- 寮美千子 (2003). 神話になった少年. ユリイカ詩と批評. 12, p118-133
- 鈴木大拙 (1972). 日本の霊性. 岩波文庫
- 濁川孝志・遠藤伸太郎・満石寿 (2012). 自然環境がスピリチュアルな講義の効果に及ぼす影響—自然がもたらすスピリチュアリティの向上の可能性—. 日本トランスパーソナル心理学/精神医学. 12 (1), 82-95.
- 星野道夫 (1996). ナスークの贈りもの. 小学館
- 星野道夫 (2003). 星野道夫著作集2. 新潮社
- 星野道夫 (2012). 悠々の時を旅する. クレヴィス
- 星野道夫 (2003). 魔法の言葉—星野道夫講演集. スイッチ・パブリッシング
- 湯川豊 (2003). 一粒の雨を見よ. ユリイカ詩と批評. 12, p66-72.
- 管啓次郎 (2003). 動物によるテクノロジーのほうへ. ユリイカ詩と批評. 12, p42-59.
- 柳田邦男 (2003). 複眼の思索者. ユリイカ詩と批評. 12, p60-61.
- 濁川孝志 (2015). 星野道夫のスピリチュアリティ：日本トランスパーソナル心理学/精神医学. 14 (1), p43-62.
- 竹田恒泰 (2011). 現代語古事記. 学研パブリッシング
- 安本美典 (2016) 『古事記』『日本書紀』の神話：<http://yamatai.cside.com/tousennsetu/sinnwa.htm> (2016年9月26日)
- ジョーゼフ・キャンベル、ビル・モイヤーズ (2010). 神話の力. 早川書房
- 星野道夫 (2003). 魔法の言葉—星野道夫講演集. スイッチ・パブリッシング
- 星野道夫 (1994). アークティック・オデッセイ—遥かなる極北の記憶. 新潮社
- 小坂洋右・大山卓悠 (2006). 星野道夫 永遠のまなざし. 山と溪谷社
- 星野道夫 (2003). 星野道夫著作集4. 新潮社